

## イザヤ34-35章 「神の報いによる救い」

### 1A 主の復讐の日 34

1B 世界の軍勢への憤り 1-4

2B エドムでの復讐 5-15

1C ボツラでのいけにえ 5-8

2C 代々の廃墟 9-12

3C 宮殿に棲む獣たち 13-15

3B 主の書物 16-17

### 2A 救いの喜び 35

1B 荒野からの喜び 1-4

1C 花の開花 1-2

2C 「強くあれ」との呼びかけ 3-4

3C 水の湧き出し 5-7

2B 聖なる大路 8-10

## 本文

イザヤ書 34 章を開いてください。私たちは、32-33 章で、主が戻られて、神の国と王となられて、正義と公正の統治が行われることを見てきました。虐げられている民のために主が来られて、アッシリアが滅びること、終わりの日にも同じようにシオンを攻めてくる諸国の民に対して、主は食い尽くす火として、彼らを滅ぼされることを語られました。

34 章と 35 章も、同じ流れです。主は、諸国の軍隊に対して、特にエドムの地において容赦なく滅ぼされ、エドムは廃墟となります。しかし、約束の地イスラエルは、荒野から回復して、人々がこの地に戻って来るという回復の幻があります。

### 1A 主の復讐の日 34

1B 世界の軍勢への憤り 1-4

<sup>1</sup> 国々よ、近づいて聞け。諸国の民よ、耳を傾けよ。地とそこに満ちているものよ、聞け。世界とそこから生え出たすべてのものよ。<sup>2</sup> 主がすべての国に向かって激しく怒り、そのすべての軍勢に向かって憤り、彼らを聖絶し、虐殺されるにまかされたからだ。<sup>3</sup> 彼らの殺された者は投げ捨てられ、その死体は悪臭を放ち、山々はその血によって溶ける。

主がアッシリアを、シオンの前で打ち滅ぼされました。それと同じことを、世界的に行なわれるのが終わりの日です。「すべての国」という言葉が大事です。聖書には、世界からの王たちが、メギド

と呼ばれる丘に集結することが預言されています。「ハルマゲドン」の戦いです。「メギドの山」という意味です。「黙 16:16 こうして汚れた霊どもは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる場所に王たちを集めた。」

反キリストの率いる諸国の王たちによる軍隊が、イスラエルの民を滅ぼそうとします。初め、残りの民が隠れているエドムのボツラというところに向かいます。しかし、天から主がやって来て、これらの軍隊と戦われます。

そして戦線は、エルサレムに向かいます。あらゆる国々がエルサレムに攻め入ってきます。「ゼカ 14:2-3 「わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」【主】が出て行かれる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。」このように、エルサレムに主が来られてこれら国々を瞬く間に滅ぼされます。そしてご自身はオリーブ山に立たれます。「ゼカ 14:4 その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山はその真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ、残りの半分は南へ移る。」

この一連の出来事を、「すべての軍勢に向かって憤り、彼らを聖絶し、虐殺されるにまかされたからだ。」とされています。主が虐殺を行なわれるのですか？と思われるかもしれませんが、しかし、ここで知らなければいけないのは、これらは彼らが行なっていることに対する報いだということです。彼らが苦しみを与えているのであれば、それに等しい苦しみを与えられるということです。言い換えれば、「復讐は主のものである」ということであります。ですから、このような箇所を読む時に、私たちは主を畏れかしこんで、「裁かれるのは主ご自身だ」ということを祈ればいいです。

そして、これら倒れる者たちの遺体が積み上がる様子が描かれていますが、黙示録 19 章において、これらの死体を猛禽類がついばむ「神の大宴会」が描かれています。「19:17b-18 さあ、神の大宴会に集まれ。王たちの肉、千人隊長の肉、力ある者たちの肉、馬とそれに乗っている者たちの肉、すべての自由人と奴隷たち、また小さい者や大きい者たちの肉を食べよ。」

<sup>4</sup> 天の万象は朽ち果て、天は巻物のように巻かれる。その万象は枯れ落ちる。ぶどうの木から葉が枯れ落ちるように。いちじくの木から実がしぼんで落ちるように。

主が来られる時の最後のしるしは、このように天変地異です。大異変です。地上だけでなく、天においても大異変が起こります。主がオリーブの山で言われました。「ルカ 21:25-27 それから、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では海と波が荒れどよめいて、諸国の民が不安に陥って苦悩します。人々は、この世界に起ころうとしていることを予測して、恐ろしさのあまり気を失います。天

のもろもろの力が揺り動かされるからです。そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」

## 2B エドムでの復讐 5-15

### 1C ボツラでのいけにえ 5-8

<sup>5</sup>「まことに、天でわたしの剣は血に浸されている。見よ。これがエドムの上に、わたしが聖絶すると定めた民の上を下る。」<sup>6</sup> 主の剣は血で満ち、脂肪で肥えている。子羊とやぎの血、雄羊の腎臓の脂肪で。主がボツラでいけにえを屠り、エドムの地で大虐殺をされるからだ。<sup>7</sup> 野牛は彼らとともに、雄牛は荒馬とともに倒れる。彼らの地には血が染み込み、その土は脂肪で肥える。<sup>8</sup> それは主の復讐の日であり、シオンの訴えのために仇を返す年だからだ。

今、話しましたように、イスラエルの残りの者たちはエドムの首都、ボツラのほうに逃げます。主が弟子たちに、オリブ山でお語りになったことを思い出してください。「マタ 24:15-16 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」山に逃げなさいと言われていますが、ユダヤ地方そのものが、山地です。唯一、そこから見える山々は、はるか死海の向こう側にある、ヨルダンの高地です。しかも、高地の南側、死海の南端にあるゼレデ川を超えると、そこから南は、はげ山になります。黙示録 12 章 6 節を見ますと、「女は荒野に逃げた」とありますが、イスラエルを表す女が、荒野に逃げています。竜は彼女を追いかけ、洪水で押し流そうとしますが、地がその川を飲み干したとあります(16 節)。

今、読んできた預言の箇所を辿っていくと、今のヨルダンにある「ペトラ」が適してきます。そこは、エドムの首都であってボツラであったとも言われます。そこは、ナバタイ人という、遊牧民のアラブ系の人々が、新約聖書の時代には王国を持っていて、ナバタイ王国がありました。ペトラには、その遺跡が残っており、今も世界遺産の観光地として有名です。そこに入るには、スークと呼ばれる、何キロも続く小道を通らなければなりません。左右は高い岩壁に囲まれています。その小道の幅は小型車も入ることができません。地形的に守られているのです。そこに、反キリスト率いる軍隊が、隠れている残りの民を襲ってくるのです。

そこに彼らを救うために主が来られます。主は、いけにえを祭司たちが屠るようにして、殺されます。それが、「主の復讐の日であり、シオンの訴えのために仇を返す年」と言っています。エドムはエサウの子孫ですが、彼らは事あればイスラエルやユダに対して悪意を持ち、ユダが倒れれば喜んでいました。エサウがヤコブにだまされたことを根に持ち、いつまでも仕返ししようとする態度、これは罪であり、神によって裁かれます。主は、エドムが自分が憎んで彼らに仕返ししているその罪に対して、イスラエルのために仇を帰すのです。復讐は主のものであります。憎しみや仕返しの鎖を解くのは、このように神に任せる信仰です。

## 2C 代々の廃墟 9-12

<sup>9</sup> エドムの川はピッチに、その土は硫黄に変わる。その地は燃えるピッチになる。<sup>10</sup> それは夜も昼も消えず、その煙はいつまでも立ち上る。そこは代々にわたって廃墟となり、もうそこを通る者はだれもない。

エドムは、永遠の廃墟となります。火も硫黄も流れ、燃焼材となるピッチもあります。地上の神の国において、エドムと、また他の箇所によればバビロンも永遠の廃墟となるとありますので、永遠の滅びが永遠の命と並立していることが分かります。それが、新天新地においても、同じような並立があります。火と硫黄の池を示す第二の死のことが、黙示録 21 章、22 章にも言及されているのです。新しい都、神の住まれる天のエルサレムがある一方で、永遠に火の消えることのないゲヘナもあるのです。

私たちが、平和に秩序を持って暮らすことができるためには、その秩序に反逆する人たちを閉じ込めておくところが必要となります。刑務所ですね。神の秩序においても同じで、ご自身の立てた永遠の秩序に反抗する者たちは、永遠の閉じ込められたところが必要となるのです。

<sup>11</sup> ふくろうと針ねずみがそこをわがものとし、みみずくと鳥がそこに住む。主はその上に茫漠の測り縄を張り、空虚の重りを下げる。<sup>12</sup> そのおもだった人たちで、王権を宣言する者は、そこにはいない。すべての首長たちもいなくなる。

「茫漠」「空虚」という言葉が大事ですね。それは王がいない状況を示しており、ここにあるように誰も住まない無人地帯になっていることを示しています。私はこの箇所を読むたびに、福島原発事故の周辺地域がしばらくそのような感じになっていたことを思います。家畜が放し飼いになっていて、あまり見かけない動物も徘徊していました。

「茫漠」「空虚」は、天地創造の時に、一日目が始まる時にあった状態です。「地は茫漠として何もなく(1:2)」とあります。そこに主なる神が光よあれ、と言われて夜と昼が区別され、それから空が、そして海と陸、また植物が、それから天体、そして海と空の生き物、そして陸の生き物です。このようにして、神が王となっていることによってそこに命が生まれました。その反対の現象を、神は裁きにおいて行なわれるということです。形あるもの、意味あるものを、全く無くしてしまうのです。

## 3C 宮殿に棲む獣たち 13-15

<sup>13</sup> その宮殿には茨が生え、要塞には、いらくさやあざみが生え、ジャッカルの住みか、だちょうの住む所となる。<sup>14</sup> 荒野の獣は山犬に会い、野やぎはその友を呼ぶ。そこには夜の鳥も憩い、自分の休み場を見つける。<sup>15</sup> 蛇もそこに巣を作って卵を産み、それをかえして自分の陰に集める。鳶もそれぞれ自分の伴侶と、そこに集まる。

王宮のあった所が、だれも人が住みつかないところとなります。代わりに、野の獣や猛禽が住むところとなります。

### 3B 主の書物 16-17

<sup>16</sup> 主の書物を調べて読め。これらのもののうち、どれも失われていない。それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。それは、主の口がこれを命じ、主の御霊がこれらを集めたからである。<sup>17</sup> 主はこれらのもののためにくじを引き、御手が測り縄で測って彼らに分け与えたので、彼らはどこしえまでもこれを所有し、代々にわたってここに住む。

これら、エドムのボツラが、誰もいない空虚で茫漠とした町になり、これら獣や猛禽が集まるのも、主ご自身が必ずそうするのだということです。主のことばは決して失われることはないことを強調するために、16 節の、主の書物の確かさを示すことばがあります。主の書物に、自分の伴侶があるという表現は面白いです。15 節にある鳶とその伴侶、という表現があったので、それをかけて語っておられるわけですが、要は、主のことばにはつながりがあるのだ、ということです。

私たちは、このように聖書通読の学びをしているのは、主のこの命令のゆえです。聖書の書物は、決してどれ一つ失われるものではないということを覚えておきましょう。「55:11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。」そして、聖書通読の学びをしているうちに、関連しているみことばがあります。一つの言葉と関連する他の箇所も見て、その全体の中で神の御言葉を見ていく、言い換えれば神のご計画全体を見ていく作業をしています。

そして、「主の口がこれを命じ、主の御霊がこれらを集めた」とあります。これも大事な教えです。すべての言葉は、靈感、すなわち神の口から出たもので、御霊によるものなのだ、ということです。「2テモテ 3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」そして、「2ペテロ 1:21 預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。」

### 2A 救いの喜び 35

そして次の 35 章は、一気に神の救いを喜んでいる将来の希望の幻になります。34 章で読んできた、滅びの姿、特にエドムの滅びの姿と真逆の姿です。そしてこれは、主ご自身が、苦しめる者たちに報いを与え、その結果として虐げられてきた者たちが解放され、自由を得ている姿です。

### 1B 荒野からの喜び 1-4

#### 1C 花の開花 1-2

<sup>1</sup> 荒野と砂漠は喜び、荒れ地は喜び躍り、サフランのように花を咲かせる。<sup>2</sup> 盛んに花を咲かせ、飲

喜して歌う。これに、レバノンの栄光と、カルメルやシャロンの威光が授けられるので、彼らは主の栄光、私たちの神の威光を見る。

荒野と砂漠が喜ぶ、とあります！ 荒地が喜び踊っています。まるでそれが生きているかのようになっていますが、神が人に贖いを与えられるだけでなく、被造物にも贖いを与えられるからです。「ローマ 8:19-22 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。被造物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」荒地の多いイスラエルにとって、これは神の救いを目で見る回復です。

そして、先ほどしおれて衰えると言われていた、レバノン、シャロン、カルメルに回復が与えられます。33 章 9 節にはこう書いてありました。「地は喪に服してしおれ、レバノンは辱めを受けて枯れ果てる。シャロンは荒地野のようになり、バシヤンもカルメルも葉を振り落とす。」自分たちの罪のゆえに、人の罪のゆえに、主は、豊かなレバノン、シャロン、カルメルを荒地野のようにします。けれども主は憐れみによって、原状回復、いやそれ以上に回復します。

#### 2C 「強くあれ」との呼びかけ 3-4

<sup>3</sup> 弱った手を強め、よろめく膝をしっかりとせよ。<sup>4</sup> 心騒ぐ者たちに言え。「強くあれ。恐れるな。見よ。あなたがたの神が、復讐が、神の報いがやって来る。神は来て、あなたがたを救われる。」

主は、この約束を今、聞いている者たちに勧めを与えられます。一つは、「弱った手を強め、よろめく膝をしっかりとせよ。」であります。アッシリアが取り囲んでいるその現実を目の前にして、信仰によって忍耐している忍耐力が落ちていきます。それが弱った手であり、よろめく膝です。しかし、しっかりとしなさいと励ましておられるのです。主が訓練を与えられるというところで、ヘブル書の著者はこここの箇所を引用しています。「12:11-12 すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、後になると、これによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせます。ですから、弱った手と衰えた膝をまっすぐにしなさい。」ちょうどリハビリをする時に、私たちはストレッチをすることによって回復させます。それと同じように、霊的にストレッチを行うのです。しっかりとさせるのです。

そこで、もう一つの勧めは、「強くあれ。恐れるな。」とあります。いつも反対する力を見ていると、心が萎えてしまう、心が折れてしまいます。しかし、強くあれ、恐れるなど励ましておられます。その理由は、主が復讐してくださるからです。主が報いを与えられます。必ず、救いを下さいます。黙示録の最後には、教会に対してイエス様が語ってくださいました。「黙示 22:12 見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。」主は報いてく

ださいます！必ず、この曲がった世をまっすぐにしてください。だから、弱った手をしっかり強めてください、足をしっかりしてください。そして恐れなくてください。

### 3C 水の湧き出し 5-7

<sup>5</sup>そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。<sup>6a</sup>そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。

これまで、イザヤは、目の見えないこと、耳の聞こえないこと、口が聞けないことについて話していました。しかし、それは霊的な目、霊的な耳、口に関わることでした。主の言葉を聞けるのかどうか、ということです。けれどもここでは、物理的に目の見えない人、耳の聞こえない人、口の利けない人の話をしています。したがって、これらのことをできるのは神ご自身であり、御国の到来なのです。ゆえに、イエス様が来られてこれらのことを行なわれた時に、人々は神をあがめました。それは、神の国の現れそのものだったからです。

バプテスマのヨハネが、牢に入れられていました。彼も、ここにいる残りの民のように、信仰をもって忍耐していたけれども、弱まっていたのでしょう。果たして、来るべき方はイエスなのかどうか、使いを送って尋ねたのです。イエス様の言葉は次の通りでした。「ルカ 7:22-23 あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラウトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」主は、御国の到来を示されました。そして、再び来られる時に、そのお働きを完全に行われるのです。

<sup>6b</sup>荒野に水が湧き出し、荒れ地に川が流れるからだ。<sup>7</sup>焼けた地は沢となり、潤いのない地は水の湧くところとなり、ジャッカルが伏したねぐらは 葦やパピルスの茂みとなる。

そして先ほどのエドムの地とは逆に、焼けた地、ジャッカルのねぐら、これらがエジプトにあるような水の豊かなところとなります。このように、主は恵みによって逆転してくださる方です。

### 2B 聖なる大路 8-10

そして、回復したイスラエルに招かれる人々は、世界中に散らばっている贖われたユダヤ人です。イエス様は、こう言われました。「マタイ 24:31 人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。」そのことを預言しているのが、次の約束です。

<sup>8</sup>そこに大路があり、その道は「聖なる道」と呼ばれる。汚れた者はそこを通れない。これは、その

道を行く者たちのもの。そこを愚か者がさまようことはない。<sup>9</sup>そこには獅子もおらず、猛獣もそこへ上って来ることはなく、そこには何も見つからない。贖われた者たちだけがそこを歩む。

私たちは、これまでもイザヤの預言で「大路」を見ました。「11:16 残されている御民の残りの者のためにアッシリアから大路が備えられる。イスラエルがエジプトの地から上って来た日に、イスラエルのために備えられたように。」出エジプトが、イスラエルにとっての救いでありましたが、第二の出エジプトと呼んだらよいでしょうか、その救いの完成は離散の地から帰還することです。今で言うなら、大路は「国際幹線道路」です。私たちの国は海で囲まれているので実感がわきませんが、国をまたいで道がまっすぐに続いています。

アッシリアに攻められている時は大路が使えませんでした。「33:8 大路は荒れ果てて、道行く者は途絶え、契約は破られて、町々は捨てられ、人は顧みられることがない。」荒れ果ててしまっているからです。けれども、アッシリアも、そしてエジプトも主が戻ってこられて、主のものにされた時には、一気にその全域が主を礼拝するためのところになります。「19:23-25 その日、エジプトからアッシリアへの大路ができ、アッシリア人はエジプトに、エジプト人はアッシリアに行き、エジプト人はアッシリア人とともに主に仕える。24 その日、イスラエルはエジプトとアッシリアと並ぶ第三のものとなり、大地の真ん中で祝福を受ける。25 万軍の【主】は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手で造ったアッシリア、わたしのゆずりの民イスラエルに祝福があるように。」アッシリアにいる人々も、エジプトにいる人々も、主がおられ、主の神殿のあるエルサレムに参拝に行くのです。そこで真ん中にあるイスラエルが、祝福を受けます。

ここ 34 章の預言では、ここを「聖なる道」と呼んでいます。主の民とされた者たちだけが、そこを歩くことができるということです。聖められた者たちだけが、通ることができます。それ以外のもの、愚か者がさまよって入って来ることはありません。これまで、大路において、獅子や猛獣が上ってきて、殺されることがありました。けれども、それもなく安全です。贖われた者、すなわち主によって買い取られた者たちだけが通ることができるのです。なんとすばらしいことでしょうか。贖いとは、買い取られることです。イエス様の流された血によって行われました。「マルコ 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

<sup>10</sup> 主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭にはとこしえの喜びを戴く。楽しみと喜びがついて来て、悲しみと嘆きは逃げ去る。

救われた喜びをもって、戻ってきます。喜び歌っています。それは、とこしえの喜びです。楽しみもついて来ます。そして、悲しみと嘆きは過ぎ去るのです。これが真実な救いです。